

博士論文（要約）

近代東京における国家と天皇に関わる儀礼空間の研究

長谷川香

本論文は、近代東京における国家と天皇に関わる儀礼空間を都市史的・建築史的観点から分析することにより、「近代天皇制と都市・建築」の関係性の一端を明らかにしようとする試みである。

明治2年(1869)の東京奠都により、行政機関や皇族・華族の邸宅など様々な施設や機能が京都から東京へと移転し、それに伴い、公的な儀礼の中心地も京都から東京へ移った。近世までの京都における儀礼は紫宸殿や泉涌寺といった古くから皇室と深く結びついた特定の施設で催されたのに対し、近代の東京における儀礼は近代以降に整備された練兵場や御料地、もしくは江戸幕府のゆかりの地など様々な敷地が利用された。儀礼空間としての敷地の利用は一時的・仮設的であり、多くの場合、その痕跡が恒久的な建造物や構築物として残されることはなかった。しかしながら、それらの敷地は儀礼を通じて国家や天皇との関係性を深め、歴史性・場所性を獲得していったのであり、近代東京における儀礼空間の在り方は、今日にいたるまでの東京の都市空間の形成に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。事実、近代東京における儀礼空間は、その用途や所有者は変化したが、その区画は今日に引き継がれ、現代の東京都心において貴重な緑地や公共空間を形成し、都市の重要な要素となっている。

このような背景のもと、本論文では、儀礼空間を、式場に建てられた建築のみならず、敷地全体、さらには式場にいたるまでの経路一帯も含めた「面」的な広がりをもった空間として捉え、その利用形態や地域一帯の整備について分析することにより、近代東京における儀礼空間の全体像を明らかにするとともに、京都との対比、江戸の継承と読み替えといった観点から近代東京の儀礼空間の特質を検証することとし、以下の3点を目的として設定した。

1点目は、都市的観点から儀礼の会場と行幸啓経路を通史的に検証することにより、近代東京における都市を舞台とした儀礼空間の全体像とその変遷を明らかにすることである。

2点目は、建築的観点から式殿をはじめとする儀礼建築を伝統の継承と模倣、創造といった観点から検証することにより、そこに表象された近代天皇制に対する国家や政府、市民の思想の一端を解明することである。

そして3点目として、都市的、建築的な儀礼空間の検証を通して、都市が儀礼に与えた影響、また逆に儀礼が都市に与えた影響を解明することである。近世まで儀礼が行われていた京都とは異なり、奠都後間もない東京には、皇室と縁のある儀礼施設は存在しなかった。すなわち、近代東京においては、皇室に縁のある施設で儀礼が催されたというよりは、むしろ儀礼の開催を通じて、会場となった敷地や施設では新たに国家や天皇との関係性が築かれていったものと考えられる。鈴木博之は、普遍的な「空間」と個別的な「場所」とを対比的に捉え、個々の「場所」に集積された「土地の記憶」、すなわち「地霊」を読み解くことにより、その集合体として都市の歴史を論じたが(『東京の[地霊]』文藝春秋、1990年／『日本の〈地霊〉』講談社、1999年)、本研究では同様の問題意識から、個々の「場所」における一時的、仮設的な儀礼空間としての利用を通史的に検証し、「場所」に積層された記憶を読み解くことにより、儀礼空間の観点

から儀礼空間の観点から近代天皇制と都市の関係性を捉えることを試みた。

なお、本研究にて対象とする近代の範囲は、近代の儀礼が当時の国家体制や天皇をはじめとする皇室の在り方と密接に関わっていたことを考慮し、近代東京において儀礼が行われるようになる明治 2 年（1869）から、近代天皇制を規定した大日本国憲法と皇室に関する事項を定めた旧皇室典範が整備され、典憲体制のもとで儀礼が行われた昭和 20 年（1945）までとした。

また、研究に際しては、各天皇紀を参照して近代における儀礼開催状況を把握するとともに、個々の儀礼の分析においては、主に国立公文書館所蔵資料、東京都公文書館所蔵資料、宮内庁書陵部所蔵資料、防衛省防衛研究所所蔵資料、東京都立図書館所蔵木子文庫資料を用い、とくに儀礼会場や儀礼建築の図面や仕様書、儀礼の次第書を重点的に分析した。

第 1 章「近代日本における国家と天皇に関わる儀礼の分類—都市を舞台とした儀礼の位置付け—」では、近代東京の国家と天皇に関わる儀礼空間を論じる際の前提として、近代日本において催された儀礼の全体像を把握し、各種儀礼における都市との関係性を評価し、都市との関係性が強い儀礼を抽出した。そして、それらを会場と経路、儀礼の手順が類似しているものごとに分類し、本研究で分析対象とする都市を舞台とする儀礼として、「祝賀儀礼」、「大喪儀」、「軍事儀礼」という三つのグループを提示した。

つづく第 2 章から第 5 章では、第 1 章でのグルーピングに基づき、祝賀儀礼、大喪儀、軍事儀礼の順に近代東京の儀礼空間について検証を行った。

まず第 2 章「祝賀儀礼Ⅰ—多様な主体が催す儀礼空間の都市的拡がり—」と第 3 章「祝賀儀礼Ⅱ—「御殿風」建築の系譜—」では祝賀儀礼を対象とし、第 2 章では都市的観点から上野公園や宮城前広場をはじめとする会場敷地とその経路について、第 3 章では建築的観点から会場配置計画とその中心に設置された式殿建築について論じた。

第 4 章「大喪儀—東京市西部の練兵場・御料地の利用と会場計画の標準型—」では、近代に催された英照皇太后、明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇の大喪儀を対象とし、敷地とされた青山練兵場、代々木練兵場、新宿御苑の選定経緯や敷地の利用形態について比較検証するとともに、式場の配置計画とその中心となる葬場殿の標準型が形成された過程を分析した。

第 5 章「軍事儀礼—練兵場と宮城前広場における観兵式—」では、軍事儀礼の中心をなした観兵式を研究対象とする。会場敷地として日比谷、青山、代々木の 3 つの練兵場と宮城前広場が利用されたことに注目し、その変遷と各敷地の利用形態、行幸啓経路について分析した。

そして第 6 章「明治神宮外苑造営前史における空間構造の変遷—軍事儀礼・日本大博覧会構想・明治天皇大喪儀—」では、第 2 章から第 5 章における儀礼種別ごとの検証を踏まえて、青山練兵場という特定の敷地に注目して分析を行った。同一敷地において異なる性質の儀礼が開催、もしくは計画された青山練兵場の空間変遷を追うことにより、「祝賀儀礼」、「大喪儀」、「軍事儀礼」という 3 種の儀礼を横断的に捉えるとともに、それらの儀礼が敷地や周辺地域に与えた影響の解明を試みた。

結章では、各章の分析結果を統合し、5つの時代区分(第Ⅰ期：明治初期、第Ⅱ期：明治5年～同20年、第Ⅲ期：明治20年～大正4年、第Ⅳ期：大正5年～昭和5年)を設定して、近代東京における祝賀儀礼、大喪儀、軍事儀礼の儀礼空間を重ね合わせ、その都市的拡がりの変遷を整理した。その結果、祝賀儀礼、大喪儀、軍事儀礼の儀礼空間は時代とともに変遷したが、個々の敷地においては、それらの異なる性質の儀礼空間が重複することもあれば、時代によって異なる種類の儀礼空間に移り変わる場合もあったことを明らかにした。そして、これらの異なる性質の儀礼によって形成される儀礼空間の都市的拡がりを通史的に捉えると、第Ⅰ期には皇城内に限定されていた儀礼空間は、第Ⅱ期において上野公園を核として北方向へと展開し、皇居移転により行幸経路は西方向へも拡がった。第Ⅲ期には、上野公園に加えて宮城前広場、そして東京市西部の青山練兵場、代々木練兵場、新宿御苑が会場敷地とされたことにより、宮城から西方向への拡がりが強まっていった。そして、第Ⅳ期に入ると、北方向、西方向における会場敷地の分布を保ちながら、行幸啓範囲はさらに東方向、南方向にも展開したが、第Ⅴ期になると、会場敷地は宮城前広場と代々木練兵場とに二極化した。それに伴い、行幸啓経路を含めた儀礼空間の都市的な拡がり、宮城から西方向に収斂されていったことを指摘した。

そして、このような儀礼空間の変遷を踏まえたうえで、序章にかかげた目的に沿い、本研究を通して明らかとなった近代東京における儀礼空間の特質について、都市的観点から、会場敷地の多様性・多義性とその類型(公園、練兵場、皇宮地・御料地、神社)、会場敷地に対する主体による志向の相違、行幸啓経路と都市整備の相互関係、そして建築的観点から、会場計画と敷地の利用形態の標準化と、儀礼建築における歴史様式の模倣を指摘した。

近世まで皇室の儀礼施設が存在しなかった東京においては、江戸幕府ゆかりの地を読み替えた公園や、近代に入り新たに整備された練兵場や御料地が儀礼会場として利用され、それら敷地では、儀礼の開催を通じて、個々の「場所」としての「土地の記憶」が形成されていった。そのような個々の「場所」における歴史には、一国の元首であるとともに、宗教的な権威であり、また軍隊を統率する大元帥でもあるという、近代日本における多義的な天皇像が映し出されているように思われる。このような現象は、東京のみならず、京都や大阪をはじめとする他の都市においても起こり得た。しかしながら、近代における国家と天皇に関わる儀礼の大半は東京において催されていたことを考えるならば、儀礼による「土地の記憶」の形成は、近代東京において顕著な現象であったと言える。

本研究で主題とした儀礼空間は、近代東京の一側面でしかない。しかしながら、近世の江戸から現代の東京にいたるまでの都市構造との関係性や、異なる都市における儀礼空間との相違を検証することにより、都市研究のみならず、儀礼研究の分野においても新たな知見をもたらす可能性を秘めていると言えるだろう。